

文 部 時 報

第 八 百 二 十 號

聯合軍の進駐と國語整理の急務 保科孝一（東京文理大學名譽教授）……………一

教育に必要なる討議法 児玉九十（明星中學校長）……………六
討議法について 勝田守一（文部省圖書監修官）……………一〇

暫定國語教材の解説 石森延男（文部省圖書監修官）……………一五

文化再建について 今日出海（文部省事務官）……………一九

米英の公民教育 伊藤良一（文部省圖書監修官）……………二二

——公民教育に関する研究——

文 部 日 誌……………表紙第二面

通 膜……………二二

三月 法令 告示……………二二

文 部 省

文化再建について

今　日　出　海

戦後ともなれば文化國日本建設と口々に言はれながら、文化はまた後廻しにされさうだ。

戦争の敗因があらゆる方面から究明され、あるやうだが、結局文化の低さに大きな理由があることは一様に認められてゐる。

それで文化を高めようと努力せぬのは、どういふわけであらう。

文化を高めるための諸施策を講ずる政治家が文化を持たぬ政治屋にすぎなかつたともいへる。また所謂文化人が文化を高めるために政治の中権に参画出来る政治力を持つてゐなかつたともいへる。

戦時中殆んど暴力にも等しい無理解な連中の腕にからつて文化は折り曲げられ、變質した事實は否定出来ぬ。この暴力に抵抗したものは災厄を蒙り、服従したものば奴隸に落ちてしまつた。文化はいちどもや、しのやうに痩せこけた。

戦争中は不急不用の文化は幾るにされた。先づ飛行機、大砲、彈丸だ、といつては文化は後廻しにされた。そして無理解で横暴な軍人や官吏の手で蹂躪され續けた。

今は文化國として伸びて行く道のみ残されてゐるのだが、實情は文化どころか、その日の糧が満足に口に入るかどうかといふ土境場に来てゐる、電車の中や往来で人々の服装を見てもくたびれた服に破れ靴、寒々とした風體である。戦後の風俗坏と論じる餘裕はない。誰も好き好んでばら服を着、ひ、破れ靴を穿いてゐる者は居るまい。實際にないのだ。そして補給も出来ぬのだ。この慘澹たる敗戦の跡に文化の芽が、最早ちつとして順番を待つてあらずに芽生えであるのを見逃してはならぬ。

丁度雪の下にもう可愛い青い芽が、春近くなれば芽生えてゐるのと同じやうだ。この可憐な芽の持つ強大な生命力に驚くべきである。

戦争中は不急不用の文化は幾るにされた。先づ飛行機、大砲、彈丸だ、といつては文化は後廻しにされた。そして無理解で横暴な軍人や官吏の手で蹂躪され續けた。

はなほ病後のひ弱さを恢復してゐない。尤も食糧はない、住宅も乏しい。そしてどうしたらもう少し食べられ、家が建つかといふ見透しがなく、未だ隣接トタンの棟合で寒さに震へてゐる人があんなに多くては、一體文化の復興を叫ぶ人は何を食べ、何處に住んでゐるのだらうと逆に質問されるだらう。

吹きツ曝しの往来で、背中を丸めて蜜柑やら南京豆を賣つてゐる爺さんや婆さんの表情をとつくり觀察するがよい。何んと動かぬ表情だらう。じつと一點を凝視したきり瞬きもしない。織るやうな電車自動車の往き交ひ、人々の忙しげな足並……そんなものに全く無関心な冷たい眼差。無論ひどい閑値で、爺にひやかし客が「爺さん恐ろしく高いわ」と値切りにかゝつても、彼の表情は變らない。何んて頑な爺さんだ。

人々の心は斯く閉されてゐる。懲念が凝結してしまつてゐる。これを解きほぐすことも文化の仕事なのだ。文化を高い雲の上に据いた人は誰か。文化を踏み躊躇つた俗吏も悪いが、また人々の手の届かぬところに上げて、文化を孤立してしまつた者と誰なしとしない。

文化が孤立したのは、文化が専門化しすぎたからだ、だから人々は文化の享受を知識の修得と心得るやうになつた。文化をまるで勉強のやうに硬苦しく學びとらうとする。斯うして學びとつた知識は教養として消化されるであらうか。脳髄の何處かに薄く記憶の形で殘つてゐようとも、決して血となり肉となつて人々を教養人として仕上げはしないぢらう。

と思ふのは子供が無知な人間と決つてゐる。知識のかげらを一杯頭にだけ詰め込んで人間を學者と呼び碩學と呼ぶのは、呼ぶ方が無知だからだ。

戦争中小さかしくも機械よりも大事なのは人間だといふ言葉を度々耳にした。そしてその人間が居らぬと歎息する聲も聞いた。だが私は言ひたい、人間を見抜く眼を持つた人が上の方にゐたらうか。少くとも人間を見抜くにはさうした修練が必要だ。人間が見抜かぬといふところから、人間の肩書きを信用するやうになつた。官等をつけたり、階級をつけて人間を種別化する。そして官等が上るためにには過失なきやうに貞管努力するために入間味が失せて消極的な

文化が我々の生活の中に溶解し、消化され、家建設もあるまいが、文化を専門化し、特殊扱いにするから、後廻しにしたり、等閑視したりするので、衣食住の問題には文化は不要と心得るところに誤謬があるのだと思ふ。

いろいろに述べたが、文化の浸透普及であつて、文化の水準が低いといふことは文化が生活に浸潤してゐないことを意味するのである。つまり特殊な文化人の專有物にすぎないからで、萬人の文化といふか、文化の共有が完全に行はれなければ、文化國家の具塊は望まれぬ。文化を高め、深めることは特殊な才能を持つた文化人の働きを俟たなければならぬが、これを享受するものは國民一般である筈だ。この意味に於て文化の解放が改めて叫ばれねばならぬのだ。

譬へば美術史を假に繙いても、そこにはあらゆる時代に様々の天才が出現し、美術の傳統を強固にし、高め深めた事實を知る然し一般庶民はどのやうに美術を享受し、生活の中に取入れてゐたかを知る必要がある。宮殿建築の障屏畫さては神奇を凝らした造園藝術等のみならず、民藝の單なる實用品がどのやうに日本人の美術的教養を含め

て奥床しさを具現したか知るべきである。

堪え難きを堪え、忍び難きを忍び……天皇制護持論者の間瀬、無能……戰時中位言葉が輕蔑されてゐたことばない。言葉

東條大將の悲劇は人間的魅力も英雄的要素も少なく、只肩書きに自己陶酔したところにありはしなかつたか。否東條首相のみならず軍人官吏の肩書きと特權に安易な自己満足感をしてゐた手合がどんなに多かつたことか、文化政策が喧傳されたが一體どんな政策があつたからう。情報司は没する、羞恥心を

といつた例も亦少しとしない。

在、事實は文化を抛棄してゐるのと一般で
あつて何の政治があらうか。
勿論食糧問題、住宅問題をよそに文化國

の象徴でもあつた。文化がこのやうな道化者に支配され、奔弄されたことは、文化を低く見る習慣を生んだ。私は昨年度々議會に足を運んだが、文化問題が政治家の間に眞面目に論議されたことがなかつたのに驚いた。先にも述べた如く、文化人が政治家に居らぬといふ事情に因るが、また文化人が政治に無関心であることにも起因する、何れにせよ文化は國家の重要な問題とならぬことに違ひない。だが、一切の軍備を永久に抛棄することを憲法に規定しようとしてゐる日本が、文化國家として再起するより他に道なき現

文化は懲罰的のとんでもない者をも殺す
も、これを愛し、文化なき生活を嫌惡する
庶民の感情にまで浸潤しなければ、文化國
家建設をどんなに四角張つて叫んでも何も
ならぬ。

食ふに食なく、着るに衣なき状態に國民
を放置して文化はあり得ない。どちらを先
にするかといふ問題ではなく、文化は常に
問題の中に溶解し、瀰漫し、空氣の如く存
在する。映畫を一月見なかつたから文化に
一月接しなかつたといふことにはならぬ。
生活の中に、考へ方の中に、あらゆるところに文化的なゆとりが必ずなければならぬ
のだ。政治家が、文化人でなかつたといふことは、即ち政治そのものの貧困を意味する
のである。従つて政治や經濟の再建に努力を拂はねばならぬ今日、文化を後廻しにす
るといつた考へ方で、政治や經濟の眞の再
建は覺束ない。政治經濟の再建と同時に國
民の努力を文化の再建に注ぐべきであるこ
とを私は主張したいのである。

と思はれてならぬのだが……
私は文化を専門化したり、生活から孤立せしめ、観念的に取扱ふ弊風を一掃することが、文化を浸透せしめる第一段階だと思ふ。文化だけを抽出してこれを高めやうとしたり、これを無理押しつけに普及させやうとすることは文化を孤立させせる基である。文化を専門化したために文化人は片輪にならうてしまつたのだ。音楽には異常な才を持つが他のことにかけては無知であり、荒んだ生活を營む専門家が何人とも多いことか。美術の知識は他の追随を許さぬ人が、生活を美しくする努力は一切拂はれぬ

お知らせ

今般文部省は昭和二十一年一月終戦再建號として更生出發することになり、定價は一部貳圓(特別行爲税を含む)に變更されました。御諒承願ひます。別に送料も申受けます。

二十一